

平和への願い



宝塚市平和モニュメント「火の鳥」

「火の鳥」は故手塚治虫氏の代表作品の1つであり、原点はロシア民話の中で、自らの体を炎に焼き、その炎の中から復活し永遠に再生し続ける「生命の象徴」として登場します。

作品中「火の鳥」は、古代から未来へと永遠に続くあらゆる生命の観察者としての使命をあたえられ、人類が、何度も繰り返したみにくい戦いの歴史をじっと見守り、新しい文明が現れるたびに、「今度こそ、戦争のない平和な世界をつくってくれる。生命を正しく使ってくれる未来を信じたい。」と願うのです。

その「火の鳥」の願いこそ手塚氏の願いであり、また、平和モニュメントを建設した私たちの願いです。

宝塚市



平和を願って

先の大戦で日本は唯一の被爆国となり、数多くの戦争犠牲者をだしました。敗戦という苦い体験をつうじて、戦争のもつ愚かさや残虐性を最も痛感した国でもあります。

私たちはこの体験をおろそかにせず、世界の平和を構築するために積極的な行動を行なう役割を担わなければなりません。

平和は世界のあらゆる人々が希求する普遍的なものであって、その努力によってこそ実現されるのです。私たちは、平和を愛する心の輪を広げ、人々が共に生き、手をつなぎ、助け合う社会を築き、恒久平和の実現にむけて、一步一步確実な努力を続けていきたいと思います。

宝塚市は、平成元年3月に世界の恒久平和を願って「非核平和都市宣言」を行いました。平成6年8月には、市民の皆様の平和への願いを具体化し、未来へ伝えていくシンボルとして“火の鳥”をデザインした「平和モニュメント」を市立手塚治虫記念館前に建設いたしました。また、平成15年9月には、核兵器廃絶平和推進基本条例を制定しました。

また、近年、諸外国において実施された臨界前核実験及び地下核実験に対しても、その都度強く遺憾の意を表し、一切の核に関する実験の中止を求める抗議文を送付しています。

そして、市民一人ひとりが、生命の尊さや平和を愛する気持ちを持ち続け、次代の子どもたちに伝えていくために、非核平和都市推進事業を推進しています。

宝 塚 市

● 平和モニュメントと故手塚治虫氏 ●

平和への希求は全市民共通の願いであり、平和の尊さを啓発し、永遠の平和社会を築くことを願って平和モニュメント「火の鳥」は平成6年8月に建設されました。

手塚治虫氏は多感な少年時代（5才～24才）を宝塚市で過ごされたゆかりの人です。同氏の作品には「戦争否定」「生命の尊厳」「平和への願い」が一貫して流れています。この宝塚での戦争体験などを基に描かれたものです。「火の鳥」の平和モニュメントが手塚治虫記念館前に建設されたことは意義深いことです。

● タイムカプセル ●

平和モニュメントの台座部分にタイムカプセルが設置されています。除幕式の時に、市民の皆さんの思いを綴った、約450通のメッセージが収納されています。カプセルは30年後の平成36年（2024年）に市長が開封し、過去からのメッセージとして皆さんにお返しすることになっています。

● 平和基金 ●

平和モニュメントの建設の際に、宝塚市の拠出に加え、市民の皆さんから募金をお願いしました。建設費の剰余金を基に宝塚市平和基金を設置しました。

● 平和への取組 ●

平和映画会

平和を願う市民のつどい

平和アニメ映画会

平和パネル展

※年度により変更になる場合もあります。

戦時下の宝塚

迫りくる戦争の足跡

昭和6年（1931年）9月18日、日本関東軍が満州の中国軍を攻撃し、満州事変が勃発しました。その後、中国との全面戦争に入り、日中戦争に突入するころから、国内においても将来の戦争における防空体制の確立が痛感され、軍民連携の防空演習が実施されるようになりました。それは、今後国民生活の場が戦場と化することを国民に予知させるものでありました。

軍需工業の進出と本土空襲

阪神工業地帯として、西宮、尼崎、伊丹に重工業・化学工業の工場が建設されるなかで、宝塚は比較的平穏な田園地帯でありましたが、軍需産業振興のあおりで昭和13年（1938年）には昭和ペアリング製造（株）の工場が、また、昭和15年（1940年）に川西航空機（株）の工場が建設されました。

宝塚新温泉の接收と宝塚海軍航空隊

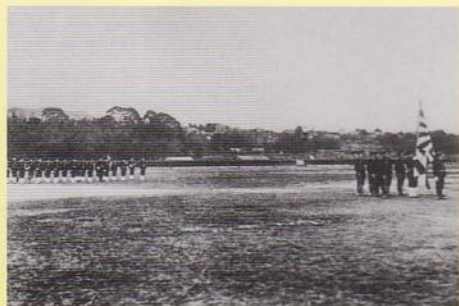
昭和19年（1944年）3月の非常措置令により宝塚大劇場は閉鎖されることになり、遊園地のみが宝塚厚生遊園地として営業を続けましたが、6月には宝塚新温泉施設が海軍に接收されることになりました。



宝塚海軍航空隊水泳訓練

接收された施設には滋賀海軍航空隊奈良分遣隊予科練習生約千名が入隊し、滋賀海軍航空隊宝塚分遣隊が発足しました。

その後、昭和20年（1945年）3月には宝塚分遣隊は独立し、宝塚海軍航空隊と改名しました。この間、常時3500名から4000名の海軍将兵が宝塚大劇場をはじめ諸施設を利用して生活していました。



宝塚海軍航空隊練兵場



東洋ベアリング歌劇生徒挺身隊



小林聖心女子学院女子挺身隊

宝塚の空襲

宝塚で直接爆撃の対象となり空襲を受けたのは、昭和20年（1945年）7月24日の川西航空機(株)宝塚製作所でした。B29と小型艦載機あわせて約150機から爆弾が投下され、20機ないし40機による波状攻撃が同所の目標に加えられました。

その被害は工場のみにとどまらず、その周辺と仁川、段上、神呪方面の西宮地域にも及びましたが、良元村の調査では死者23人、重傷者8人、家屋の全、半壊449戸となっています。負傷者は宝塚第一、良元両国民学校に収容され、そこが救護所にあてられました。

昭和20年（1945年）8月6日には広島に、ついで同9日には長崎に原子爆弾が投下され、戦局は日本の完全な敗北を決定づけるものとなり、同15日の終戦を迎えることになりました。

〔出典：宝塚市史第3巻より抜粋〕

川西航空機宝塚製作所被爆状況



星条旗がひるがえる東洋ベアリング武庫川工場



非核平和都市宣言

青くすみきった空、清らかな武庫川の流れ、緑あふれる六甲・長尾の山々……。この素晴らしい自然と明るくおだやかな暮らしは宝塚市民すべての願いです。

このような私たちの願いに反し、世界では依然として、人類同士の悲しむべき争いが絶えず、しかも地球上の全生命を滅ぼすことのできる核兵器が蓄積されてきました。

しかし、人類の平和への切実な願いが全世界に高まり、大きなうねりとなって、ようやく戦略核兵器の縮小や、各地域の紛争解決への明るい兆しが見えようとしています。

私たちは、このようなときにこそ、戦争を、そして核兵器をなくし、世界の恒久平和を強く願わずにはいられません。

ここに、宝塚市は憲法の平和精神に基づき、恐るべき核兵器の廃絶を願い、永遠の平和社会を築くことを誓い、「非核平和都市」とすることを宣言します。

1989年（平成元年）3月7日

宝 塚 市

